

KOMAZAWA × TOKUBA 駒澤大学2-1筑波大学

相手DFをドリブルで交わそうとする原

(撮影・川崎篤彦)

原2ゴール！宿敵筑波に勝利！！

干すの証明

前夜の豪雨が嘘のような晴天。赤く染まった競技場で10番の背中が閃いた。駒大に勝利を呼び込んだのは、自身の技術を遺憾なく発揮した原の2ゴールだった。

7分、中盤の底から塚本のロングパス。ハーフウェイライン付近で待ち構えていた巻がヘディングで競り勝ち、ボールはゴール前の隙に渡る。正面には相手ディフェンダー。ファーストタッチこそ処理を誤るものの、原はここで崩れなかった。慌てずにボールをコントロールし、落ちて着いてゴール正面に叩き込んだ。

再び歓喜が上がったのは、またもエースの右足から。76分、竹内に代わり途中出場の樽原が中央でパスを受ける。ふわりとしたワンタッチ。左サイドを駆けあがる栗平にそのままはたくと、巻さんを狙ったけれど、うまく抜けてくれた。とのコメント通り、栗平の送ったクロスはゴール前で競り合った巻の頭上を越え、ファーサイドの原の足元へと収まった。右足一閃。角度のない所からのシュートはゴール左上へと突き刺さった。(クロスが)抜けてくるかなと思ったら抜けてきたのでおもしろいって打ては入ると思った」と原は言う。

原はこの日チーム最多となる5本のシュートを放ち、前々節の中央大戦に続いての得点。しかも2得点の活躍で自身4ゴール目。1点は取れたが、取れるところで取れなかった。まだ取れた。(2ゴールは)たまたま。慢心しない。殊勲賞のエースは試合後、淡々とだが真っ直ぐに自分のプレーを振り返った。

チームは今節も前節・前々節に続き4バックを採用。(相手に)簡単に抜かれてしまった。(筑城)と悔やむ。36分の失点シーンは、守備陣の一瞬の隙を突かれたものだが、これ以外には特に決定的に崩される場面は作らせなかった。ハーフタイムには、クリアしたとき押し上げが遅くて中盤で拾われてしまった。(菊地)プレッシングなどの約束事を再確認。その結果、後半は駒大が完全にゲームの実権を握った。それは筑波大のシュート数が前半7本から後半は2本と激減したことと、逆に駒大が前半5本から後半は実に倍近くの9本ものシュートを放ったというデータが如実に物語っている。